

## 2020年12月27日 説教「いつも喜んでいなさい」

詩篇 100 篇、ローマ 12 章 15 節、テサロニケ第一 5 章 16 節

今朝は年末礼拝。今年の御言葉を覚えて、聖書の三か所から学びます。

### 1. 詩篇 100 篇

- ①喜びの源泉 (1~2) **「全地よ。主に向かって喜びの声をあげよ。喜びをもって主に仕えよ。喜び歌いつつ御前に来たれ。」**ここに喜びの源泉が記されています。神に喜びをもって、礼拝をささげることが人間にとっての必然なのです。元々の自然なありかたなのです。そして、心からの賛美をささげて行くことにより、喜びの通路は広がっていくのです。
- ②造られた者(3) **「知れ。主こそ神。主が、私たちが造られた。」**それではなぜ、神を礼拝するところに喜びの源泉があるのでしょうか。それは、私たちが主なる神によって造られた存在だからです。**「神は人をご自身のかたちとして創造された」**(創世記 1:27)とありますが、人間は始めには神との間に隔たりなく生きていたのです。ところが、神との約束を破り、その関係を壊してしまった人間は本来あるべきありかたを見失ってしまったのです。そこにキリストは来て、創造主を新たに知る者道を開いてくださったのです。
- ③羊である者達 (3~5) **「私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊である。感謝しつつ、主の門に、賛美しつつ、その大庭に入れ。主に感謝し、御名をほめたたえよ。主は慈しみ深く、その恵みはとこしえまで。その真実は代々に至る。」**私たち人間はまた、羊のような存在です。羊は弱く、迷いやすいのです。どうしても羊飼いが必要なのです。人は羊飼いであるキリストによって導かれてこそ、喜ばしく、平安のうちに過ごすことができます。羊飼いによって見守れている羊たちは、その大庭で草を食み、慈しみ深い主のもとに憩いを与えられるのです。私たちも同じです。

### 2. ローマ人への手紙 12 章 15 節

- ①喜ぶ者といっしょに (15 節) **「喜ぶ者といっしょに喜び」**それでは実際的な生活において、私たちはどのように喜べるでしょう。今朝は、人間関係について考えてみます。救済論を教えるローマ書ですが、12 章には実際的な勧めがなされています。その 15 節は実際的には案外難しいです。なぜなら、私たちには妬みという罪が巣食っているからです。他人が喜んでいるのを知れば、自分と比較しはじめ、容易には「いっしょに喜ぶ」ことはできません。主を礼拝する心に導かれ、聖霊のとりなしがある時に

はじめて、この御言葉の実践がなされていくことになるでしょう。そのように導かれることは幸いなことです。そこには主なる神の恵みが働いていると考えられるからです。

②泣く者といっしょに(15節)「泣く者といっしょに泣きなさい。」なぜその人が泣いているのかはわかりません。ここの泣く者というのは悲しんで泣いている人でしょう。泣いている人と会う人は、同情するかもしれませんが。誰しも、悲しみの材料を抱えているからです。しかし、泣く者に冷たい目を投げる人もあります。そうしたことを考えると、聖霊のとりなしがなければ、この御言葉に対して的を得た実践はできないのです。

③喜び泣く者たち(15節)「喜び者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。」さて、これまでは15節を複数の人としてみてきました。それでは、この節にある人を一人格として見たらどうでしょうか。喜ぶ者といっしょに喜びにくくても、その人がその陰においては悲しみをも抱えていると想像力を働かせてみましょう。その人に難しい状況のなかで、喜ぶ状況が与えられたことを知れば、ともに喜びやすいのではないのでしょうか。しかし、こちらも聖霊のとりなしがあればこそ、実現するのです。人間関係において、他の人の喜びを共有することができれば、人と人との間に麗しい関係が生まれる可能性があります。

### 3. テサロニケ人への手紙 5章 16節

①霊肉の健康(16節)「いつも喜んでいなさい」喜びは、神を見上げる者たちの霊性の計りになります。なにしろ、御霊の実の二番目に記されているのです(ガラテヤ 5:22)。天来の喜びがあるということは、その人が御霊に導かれているからでしょう。その人は、霊的な健康が与えられているのです。また、喜びは私たちのこの肉体の健康にも良きものをもたらします。どんな所でも主を第一にして歩むなら、私たちの肉体をも健康にし、骨は元気づけられるのです(箴言 3:8)。

②主からいただく(16節)ピリピ書 4章 4節には「いつも主にあって喜びなさい。」とありますが、喜びは主につながっている者に備えられていくのです。ぶどうの木に、その枝が繋がっている時に、実は結ぶのです。キリストにつながっていなければ、身を結ぶことはないのです(ヨハネ 15:4)。

③いつも喜ぶ(16節)「いつも喜んでいなさい」。喜んでいることが鍵であると教えていると言っても良いかもしれませんが。いつも喜ぶことなど不可能だというのではなく、いつも喜ぶ道が備えられているということを素直に受け止めましょう。そして、「喜び」という実はおいしく、周囲の者たちまでもが、その喜びによって、喜ばされるのです。

### 《結論》

「いつも喜んでいなさい。」と導かれて、2020年は始まりました。と  
ころが、始まって間もないころから、コロナ感染問題が始まったのです。

何か試されているような感じがしました。「あなたたちは、このような事態の中でも、喜ぶことができますか。」と問われたのです。

でもよく考えてみれば、コロナ感染問題がなくても、私たちの歩みに

は、問題や試練は絶えずあったのです。それぞれのやり方で、それら

を  
紛らわせてきましたが、確かにいつも私たちに苦しめるものはあったのです。通奏低音のようにいつも響いていたのです。それはヤコブに

と  
ってはエサウとの確執、ヨセフにとっては兄弟達との断絶。それらは

心  
のうちにしまっただけであっても、決して消えていくものではありませんで

した。あなたにも、誰にも言えずに心の一つの部屋にしまっただけ

があるでしょう。あるいは、それほど奥の部屋ではなく、心の玄関近

く  
にあって、いつも気になっていることもあるでしょう。そこに「いつも

喜んでいなさい。」という御言葉が示されているのです。この御言葉は、

どんな場合でも、どんな課題でも、いかなる時にでも、私たちに喜び

を  
もたらしすることができることを示してくれているのです。

そこでです。いつも喜ぶ秘訣は、冒頭に学んだように、主を礼拝する

ことにあるということ再度覚えたいのです。私たちは礼拝に臨んで、

いろいろと人間の思い巡らしをするでしょう。それが不必要だとは言

いません。しかし、「喜びの声をあげよ」「喜び歌いつつ御前に来たれ」と

促されているのは、さまざまな心配や悩みを抱えている私たちが、ひとたびはその荷物をおろして、主なる神に心を集中させていくことなのです。人間を思うのではなく、主なる神を霊想し、祈りと賛美を

しましょう。そこにこそ、「いつも喜んでいなさい」という道が開かれてくるのです。また、キリストの福音にいつも立ち返りましょう。キリストが私たちの罪のために十字架にかかり、よみがえって下さった主であることを覚えつつ歩むことは喜びの礎です。また今朝学

んだように、友人関係にも想像力を豊かにして歩いていきましょう。

コロナ禍にあって続く試練。健康問題、経済問題。元々あった人間関係や将来の問題、そして罪の問題。それらは、抱え込んでも自分では解決がつかないのです。主なる神の前にさし出していくしかないのです。そうしてこそ、「いつも喜んでいなさい」という御言葉が、私たちのうちに実現していくのです。そう信じて、主の前に何もかも申し上げつつ、そこを主に関わっていただきましょう。「いつも喜んでいなさい」。この御言葉の真実を、今後も私たちの信仰生活において味わっていただくではありませんか。